



# マレーシアスタディツアー

## ～子どもたちと共に「豊かさ」を考える～

2026. 2. 4 ～2.12

KIRARI, UTANO, FUMINA, AOI, ATTO, CHIHIRO, SUZUHA, MAHO,  
NIANCHEN, MIRI, HANA, NAO, YUKINO

- 主催 : 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター (WAVOC)  
現地プログラム担当 : 認定特定非営利活動法人 CFF ジャパン  
担当教員 : 岩井雪乃 (WAVOC 准教授)  
コーディネーター : 内海研治 (CFF ジャパン)



## CONTENTS

- ・ 参加者紹介 … p. 2-3
- ・ ツアー概要 … p. 4
- ・ 日直記録 … p. 5-13
- ・ 個人報告書 … p. 14-36
- ・ 旅の思い出 … p. 37-38
- ・ おわりに … p. 39

# MEMBER

**KIRARI**



**UTANO**



**FUMINA**



**AOI**



**ATTO**



**CHIRO**



**SUZUHA**



**MAHO**



**NIANCHEN**



**MIRI**



**HANA**



**NAO**



**SPECIAL THANKS...**

**YUKINO**



**KENJI**



**JONATHAN**



## —ツアー概要—

2026年2月4日（水）～2月12日にかけて、マレーシア、ボルネオ島に位置するサバ州でスタディツアーが実施されました。本ツアーは特定非営利活動法人 CFF ジャパンの協力のもと、「子どもたちと共に「豊かさ」を考える」ことを目指しました。目まぐるしく変化する東京での生活から離れ、自然に囲まれたサバ州での8日間は、参加者それぞれが自分自身と向き合う時間になりました。

8泊9日（機内1泊）の行程は以下の通りです。

Day 1	2月4日	成田出発 コタキナバル着
Day 2	2月5日	クンダサン戦争記念公園訪問 テルピット地域での農村ホームステイ
Day 3	2月6日	小学校での子どもたちとのアクティビティ ピースセミナー
Day 4	2月7日	小学校でのペンキ塗りボランティア ホストファミリーとの交流
Day 5	2月8日	バパール地域の児童養護施設滞在 子供たちとのアクティビティ
Day 6	2月9日	児童養護施設についての講演 教育ボランティア
Day 7	2月10日	児童養護施設内視察 バパール視察
Day 8	2月11日	無国籍集落訪問 コタキナバル出発
Day 9	2月12日	成田着

これらの体験を通して、参加者はサバ州の自然豊かな環境や、子どもたちとの笑顔あふれる交流を存分に味わうことができました。他方、その魅力の裏にある「グローバルな変容にさらされる農村」、「親と暮らせない子どもたち」といった問題を理解し、暗い現実直面することにもなりました。戦争の歴史、都市と農村の格差、CFFの目指す未来などを学び、命と向き合う姿勢や豊かさの根本的価値観について、深く考える機会を得ました。

また、ツアー中には各々が感じたこと、考えたことを共有する時間が設けられました。多様な「当事者」と関わって抱いた本音を、参加者同士でシェアできたことは、それぞれの生き方を考える糧になったことと思います。

## 一日直記録

**Day 1: 2月4日 マレーシアへの一歩目**

朝7時30分に成田空港、第二ターミナルに集合した。まだ事前研修で2回あっただけで今回が3回目の対面になり、どこか距離もある中でお互いに声を掛け合う様子だった。



無事にチェックイン、出国手続きを終えて搭乗ロビーで遅れている飛行機を待ちながら、それぞれがサークルや学業の話、そして過去の外国経験など他愛もない話をした。およそ8時間の成田からクアラルンプールへの長いフライトでは、映画を見たり、本を読んだりとそれぞれが自由に自分時間を過ごす中で、マレーシアで出会う人のために折り紙を折る姿も見られた。機内では昼食と軽食

の提供があった。昼食はカレーのような味付けの美味しい魚を頂いた。軽食ではパンとおにぎりから選択することができ、まだ日本らしさを感じることのできる時間であった。しかしアナウンスや客室乗務員とは英語での会話になり、今からマレーシアに向かうのだという実感もあった。

成田の出発の遅れからクアラルンプールへの到着も30分ほど遅れ、飛行機から降りた時にはすでにコタキナバルへ向かう飛行機の搭乗が開始している時間だった。クアラルンプール国際空港に足を踏み入れた途端、あったかい湿った空気を感じ、マレーシアに到着したのだという実感が湧いた。急ぎの中ではあったが空港内でジャングルボードウォークが見えたりと、熱帯雨林、マレーシアを感じることができた。そしてターミナルをつなぐエアロトレインに乗ってコタキナバル行きのフライトに向かった。入国審査では自動機械に引っかかるメンバーもいたが、無事に入国をし、搭乗ロビーについた。表示時間では搭乗時刻はとっくに過ぎているのにも関わらず、搭乗ゲート前に多くの人がくつろいで座っている様子があった。そこで私たちはコタキナバル行きのフライトが遅延していることと、無事に私たちが乗り継ぎに間に合ったことを悟った。それと同時に、多くの人が焦る様子もなくのんびり出発を待つ姿を見て、これがマレーシアなのだと感じた。各々トイレに行ったり、マレー語を教えあったり、折り紙について話してみたりと自由な時間を過ごした。そして約3時間のフライトでは夕食の配布もあった。

そして午後22時過ぎ、東京、成田空港を出発しておよそ12時間後にコタキナバル空港に到着した。CFFのけんじとJonathanと合流し、両替を行い、初日の宿であるToojouに

向かった。乾季なのに連日雨が降り続けているマレーシアは、外に出ると日本の夏の夜のような湿気と暑さがあった。カーブでもスピードを落とさず車間距離の近い運転は外国を感じさせるものであった。Toojou につくと明日の予定の確認をした後それぞれ部屋に向かい、お風呂や寝る準備をした。何人かは水しか出ず冷たい水でのシャワーを余儀なくされたメンバーもいたが疲れからか、ベッドに入るとすぐに静かになり眠った。

## Day 2: 2月5日 日本の外で、日本を知る

朝は7時に起きて、それぞれ身支度を行い、7時45分からモーニングディプションを行った。この時間ではそれぞれが聖書を手に持ち、ある箇所について読み上げ、けんじの解説とともに理解を深める。CFF やこれから向かうインバックの host family の背景を探ることも目的の一つである。マレーシアで初めて迎えた朝であるこの日は、この経験がこのタイミングで自分に与えられた意味は何かを問うものであった。



その後、みんなで朝食に向かった。朝食ではトーストしたパンにココナッツのジャムを塗ったカヤトーストとミルクティーのような味のティーススを頂いた。そして現地のコンビニを見たり、荷造りをしたりしてスマホを預け、ホームステイ先であるインバックの村に向けてバスで出発をした。道中ではトイレ休憩とマーケット見学を挟みながら進んだ。トイレではトイレトペーパーが流せず、水もバケツから組んで流すという日本ではあまり見られないトイレを経験した。休憩場所では必ずと言っていいほどフルーツやお菓子を買って現地の味を楽しんだ。移動中には Jonathan による Sabah クイズや現地の紹介があった。

途中、クンダサンで戦争記念公園を訪問した。マレーシア、そしてサバが第二次世界大戦中に日本領になった時代のことについて映像を見ながら学んだ。捕虜となったイギリス兵やオーストラリア兵が連れてこられ、デスマーチと呼ばれる長い、長い行進によって多くの捕虜が犠牲になっただけではなく、現地の住民たちも多大な被害を受けた。日本の視点でしか知らなかった戦争についての事実を、現地に足を踏み入れて現地の人の言葉で聞く経験をした。その後、近くでソトアヤムと呼ばれる、チキン米粉麺とチキンを頂いた。

午後にインバックの村に着くとたくさんの子どもたち、犬や猫、そして明るい現地の楽器の演奏で私たちを迎えてくれた。ホームステイ先に着くと、すぐに自己紹介とおやつタイムがあった。メニューを紹介しながらみんなでリピートし、お祈りをして「いただきます」をするやり方は多分このおやつが初めだっただろう。荷物を置いた後、近くの川まで散歩に行った。たくさんの野良犬や隙間が大きく車が通るたびに壊れそうな恐怖と戦う橋、AWAS と書かれたワニ出没注意の看板、少し濁った川、トラックの荷台に乗ったたくさんの家族が手を振りながら通過していく姿、どれも日本では見られない貴重な瞬間だった。



お風呂は1-3人でバケツに水を溜め、それを汲みながら浴びた。初めての水シャワーに蜂が侵入してきて叫びながら対処したりと、心も体も強くなったような気がするマンディ（水浴び）だった。夜は鶏の声や礼拝の音楽、強い雨の音に阻まれ、何度も目を覚ましながら寝ていた。

作成者: 大塚 涼葉

### Day 3: 2月6日 歓声に溶ける境界線と、正解なき平和の定義

インバックでの初めての朝を迎えた。

午前中は小学校で交流レクリエーションをさせていただいた。我々の姿を見るやいなや、授業中であろうに窓から多くのこどもたちの笑顔がのぞいた。自己紹介を兼ねた〇×クイズや100人以上が連なったじゃんけん列車、バナナ鬼をレク係の2人が中心となって進めてくれた。最後には全員で『幸せなら手をたたこう』を歌った。言語の壁など取るに足らなかった。そこにあったのは、コミュニケーションを円滑に図るための機械的な笑顔ではなく、心から笑う姿であった。

また輪の中から一歩離れて様子を眺めているこどもの姿もあり、どの社会にも共通する



普遍的な人間関係の在り方を再認識させられる一幕もあった。終了後には、紙とペンをもったこどもたちが次々と集まり、交流の余韻が続いた。

学校案内では授業の様子を見学した。設備が十分とはいえない環境でありながら、真剣に勉学に励む姿は、自

分たちが特権的な立場にいることを自覚させたのではないだろうか。また、日本のサブカルチャーの影響力の強さを目の当たりにした。特に流行の TikTok が海を越えて浸透している様子は印象的であった。さらに先生方の話から戦争の歴史を想起し、加害国としての日本の存在も改めて意識させられた。それでもなお、温かく歓迎していただいたことは、決して当たり前ではないと強く感じた。

昼食後には牧師によるピースセミナーを受けた。“forgive in love”という言葉が強く印象に残っている。関係をもった者は皆家族であるという考え方や、「信仰か命か」という問いにたじろぐ姿は、一人ひとりに「平和」や「家族」の意味を問い直す契機となったと思われる。しかし、教科書には載らない日本兵による残虐な行為を聞いてもなお、どこか現実味を持たず、他人事のように感じてしまう自分もいた。どのような感情を抱くのが正解なのか、未だ分からずにいる者もいるかもしれない。

講演後には、セミナー前後で「平和」の認識がいかように変化したのかを共有する時間が設けられた。情報戦に知らぬ間に巻き込まれている現代において、何が、誰にとっての真実なのか、そしてどのように情報を選び分けなければならないのかを考える必要がある。私たちはその苦境の最中にいるのかもしれない。



夕食後には、村のユース達と「1ヶ月後に死ぬとしたら何をするか」というテーマで10項目を書き出し、最終的に1つに絞るワークを行った。多くの人が「家族や友人と過ごすこと」「信仰を深めること」を選んでおり、彼らにとって信仰が生活の中心にあることを実感した。

### Day 4: 2月7日 家族という名の円陣 ~一夜の交流が問いかけた現実~

ホームステイ3日目。モーニングディボーションの後、皆で朝食をいただいた。こうして顔を迎え合わせながら食事をするのも、最初こそそばゆい気分になったが徐々に慣れてきたようである。前夜に一緒に作ったゴマ団子の出来栄に驚いたり笑い合ったりする、温かな時間であった。

午前中は小学校で集会場のペインティングを行った。校長先生が直々に塗装のお手本を示してくださった。また仲間の一人に画伯がおり、いただいたスペースにあつという間に早稲田大学のマスコットキャラクターを描き上げた。昼食後には手形に名前を書かせていただき、体調が優れない仲間も含め、12人全員の足跡を残せたこと、この場所との繋がりを象徴する光栄な瞬間であった。

その後、インバックのインフォメーションセンターに伺った。手つかずの自然の美しさと、アブラヤシのプランテーションに象徴される搾取構造との対比が強く印象に残った。「開発」という言葉はしばしば、マジョリティーを納得させる正義として語られる。しかし、その背後で不可視化された問題の所在について改めて考えさせられた。



インフォメーションセンターを後にして、私たちは川へ向かった。初めて車の荷台に乗る経験をし、川では思い思いに感情を解放させていた。残念ながら滝を見ることはできなかったが、大自然を前に、皆が童心を取り戻したように笑っていた。

しかし、ある事件が起きた。仲間の一人が、水中に眼鏡を落としてしまったのだ。20分以上の搜索の末、見つからないのではないかと誰もが諦めかけたそのとき、不意に「あった！」という声が響いた。皆の視線の先には、深い緑の中で、ひときわ暖かな色が揺れていた。

帰路の途中で、新たな教会建設予定地を訪れ、そこでおやつをご馳走になった。ここに来てからというもの、有形無形問わず、支えていただいていたばかりである。私たちの多くは「日本人」であり、歴史を顧みれば日本人に対して複雑な感情を抱く人がいても不思議ではない。正直なところ、突然やって来た有象無象の学生として、どのように見られるのかという好奇心と同時に、大きな不安もあった。しかし、インバックで出会った人々は、誰もが温かく迎え入れてくださった。その事実、感謝だけではなく戸惑いも覚えた。惜しめない善意を受けるほどに、自らが置かれている特権的な環境を意識せざるを得ない。この戸惑いは、今回の交流を通して、私たちが向き合うべき真実のひとつだったかもしれない。

夕食では村のユース達がバーベキューを準備してくれた。床に座り、大きな円になって食事を共にする時間は、家族と形容されるような一体感に満ちていた。

フェアウェルパーティーではダンスや歌を楽しんだ。私たちはソーラン節を披露し、さらに、日本で流行の楽曲を紹介することで互いの文化を共有した。ありきたりな表現かもしれないが、一人ひとりにとって何にも代えがたい時間になったに違いない。



作成者：門脇 葵

### Day 5: 2月8日 彼らを支えるもの ~教会での体験を通して~

この日の朝は、ホストファミリーの家での最後の食事となった。日本から来た我々を歓迎くださり、毎食美味しい食事を用意していただいたホストファミリーには感謝しか



ない。荷造りをして、車の荷台に乗りインバック村の教会へ向かった。ゲストは前に座らせていただけるらしく1・2列目に着席した。着いた瞬間から迫力のある歌声が聞こえてきた。マディン牧師に私たちを紹介していただき、挨拶をした後、昨晚練習した“S'gala Puji Syukur”を全員で歌って踊った。岩井先生とけんじからの言葉の後に、たく

さんの讃美歌やそれに合わせた女性たちによるダンスなどはとても見ごたえがあった。讃美歌は初めて聞くものが多かったが、どれも神を強く愛する内容が多く、彼らの信心深さを感じた。新しい教会を建てるための寄付も行った。パンとワインの代わりに牧師さんたちからお祈りをしていただいた。毎週日曜日に教会に行くことが彼らの中での当たり前で、そんな当たりの日常として日本では意識することのない宗教観に触れられた体験は私たちの知見をまた大きく広げるものとなった。

教会が終わった後、早めのランチとして野生動物の肉や赤いドリアンなど、村ならではのものをいただいた。村の人々やユースたちと交流し、言葉を交わしたり、写真を撮った

りした。別れの際は村の人々がとても温かく送り出してくださり、人のつながりを感じることができた。たった3日間の交流だが、そこには目に見えない絆や繋がりが確かに生まれていることを実感した。

そこからバスで約6時間の旅を経て、子どもの家があるパパールへ向かった。ついに子どもの家に到着！足を踏み入れた瞬間、自然が広がっていた。子どもたちの姿が見え、私たちのことを歓迎してくれているのが伝わった。Welcome partyとして子どもたちがバイオリンなどで“Original Sabahan”を演奏してくれた。また、kiroroの「未来へ」を日本語で歌ってくれた。子どもたちの多才さに驚いた。夜は担当メンバーが企画してくれたレクリエーションを子どもたちと行った。だるまさんがころんだと伝言ゲームを実施したが、子どもたちの無邪気さに心打たれた。

### Day 6: 2月9日 ここに来た意味

モーニングディボーションとして、貧しい人は満たされる幸せがあるといった内容の箇所の聖書を読んだ。マレーシアは日本と比べたら物的には不便だが、そこに暮らす人々は笑顔で幸せそうに暮らしている。そんな彼らを見て、豊かさとは何か考えさせられる。

午前にはCFFについての説明を受け、子どもたちのバックグラウンドやCISPプログラムと言われる個別支援プログラムについて学んだ。2028までのビジョンとして“Home Coming”の話があったが、卒業生たちが次は子どもたちのサポートをし、リーダーやメンターの立場へと成長していくというシステムは非常にサステナブルな人的環境だと考えた。その後、施設内ツアー（前編）が行われ、子どもの家がゼロからつくられてきた歴史を学んだ。自分たちが踏みしめている地面もジャングルを切り拓いて道を作った先人たちのおかげであるということを実感した。



午後は「このツアーで1番心に残ったこと」のテーマでシェアをした。多くのものに触れ、感じたことを言語化し、他者に共有する行為は、自らの学びを深める時間であった。ボランティアの意味、宗教、帰ってから何をしていくか等、各自の考えを聞くことで参加者のことも理解することができた。

夜は子どもたちの勉強しているところを見学させてもらった。年長のこどもは、SPMという高校卒業認定試験が12月に控えており、参加者と共に数学の問題を解く姿が見られた。他の子どもたちもそれぞれに合ったレベル・教科の勉強をしていた。日本とは異なる教育システムについても知り、子ども

たちが勉強面でも自信をつけていくために CISP プログラムがあるのだと学びが結びついた。

作成者：渡部 未莉

### **Day 7: 2月10日 命の循環と、揺るぎない価値観への接触**

マレーシア滞在中も終盤に差し掛かったこの日の午前、私たちは鶏の屠殺体験を行った。自らの手で命を止め、羽をむしり、解体して昼食としていただく。スーパーで「肉」というパッケージとして並ぶ前の、血の通った「個」としての命を奪う手触りは、これまで頭で理解していた「食」の概念を根底から揺さぶる重みがあった。

午後は、マレーシアの教育制度が抱える課題についてのプレゼンテーションを聞き、「CFF 子どもの家」敷地内ツアー（後編）を実施。持続可能な教育環境づくりに関して、敷地内の養鶏場や貯水システムも見学した。夕刻には現地マーケット散策へ向かい、施設から少し離れた街の雰囲気を感じた。その道中、車窓から移送前拘置所も通りかかった。人権の重み、不法入国の問題が日常のすぐ隣にあることを意識せざるを得なかった。夜のフェアウェルパーティーでは、「CFF 子どもの家」の子どもたちと最後の交流を深めた。子どもたちからの歌のプレゼントや、早大生によるソーラン節のパフォーマンスを通し、終始笑顔が絶えなかった。最後にはみんなで輪になって、Believe を合唱する温かい時間となった。



### **Day 8: 2月11日 無国籍集落の視察と、多層的な現実の露呈**

ツアー最終日の午前、私たちは無国籍支援教育団体 RAINBOW OF HOPE を訪問した後、無国籍集落へと足を運んだ。RAINBOW OF HOPE では、無国籍の子どもたちがより良い生活そして人生を送ることを目指し、識字教育、技能訓練、食糧支援、医療支援プログラムなどの取り組みを行っていると学んだ。実際の集落には、一面に広がるゴミの山、その傍らで教育支援を受ける子どもたちの姿があった。「教科書の中のこと」ではない、という緊張感を感じながら、皆真剣にその光景を見つめていた。

午後のショッピングモール散策では、午前中の光景とは対照的な近代的な消費文化が見

えた。マレーシアという国の持つ多層的な現実を学んだ。空港に着き、お世話になったけんじ、ジョナタンとも名残惜しい別れの時を迎えた。出国審査で機械の不調のため戸惑う場面もあったが、全員無事に通過し、夕方のフライトでコタキナバル→クアラルンプール、そして深夜にクアラルンプール→成田へと向かった。



### *Day 9: 2月12日 帰国、そして「日常」への問い直し*

早朝、冷え切った冬の空気の日本に到着。清潔な水、整ったインフラ。それらに触れて思わず身体が安堵するのを感じると同時に、現地で得たものを忘れたくないという強い想いが芽生えた。

今回の三日間で得たものは、明快な答えではなく、シェアリングでも一人一人が口に出したように、一生抱え続けるべき「問い」である。今回の経験を大切にしながら、それぞれの道でこれからも頑張っていける仲間でありたい。8泊9日、ありがとうございました！



作成者：山岸 奈央

—個人報告書—

**鶏と魚と私**

商学部 1 年  
福地 輝

マレーシアスタディツアー 7 日目に行った鶏の屠殺、帰国後に訪れた能登で行った魚を捌く経験、そしてその過程における自らの考えを記す。

マレーシアスタディツアー 7 日目午前 9 時 0 0 分、鶏が 3 羽、足を縛られた状態で袋に入れられ、運ばれてきた。庭に出て、屠殺するための準備が始まった。

屠殺とは、家畜などの動物を殺すことである。屠殺には最低二人が必要で、一人が鶏の頭側で首にある大きな血管を断つ役割、もう一人が体を押さえ、鶏が暴れないように抑える役割を担う。まず、首の周りの毛をむしり、血管が見えるようにしてから、ナイフで断ち切る。血がよく流れるように、首を下に、体を上に持ち上げながら血を流す。事前に掘っておいた穴に、鶏の首から流れる血を溜める。血を流す作業が終わると、熱湯で体全体を濡らして羽をもぎやすくする。そして、全ての羽をもぐ。こうして、調理の段階へと移る。

私は、3 羽目の鶏の首を持ち、血管を切って血を流す役割をやらせていただいた。ナイフは一度では通らず、何度も刃を入れなければいけなかった。それでも断ち切れず、反射的に「ごめんなさい」「うまくできない」と繰り返した。スタッフが手伝ってくれたが、切る方向に力を加えるスタッフとは反対に、無意識のうちに逆の力を加えている自分に気づいた。血を流し終え、自分の手を見ると、鶏の血と羽が付着していた。周りを見渡すと、肩を震わせて泣いている人や、呆然と一点を見つめる人がいた。そんな光景を見ながら自分の行為を振り返り、ひどく混乱して涙が出た。首を切って血を流している間も強い力で暴れている鶏を見て、命の重さを実感した。屠殺から、羽を全てもぎ終える工程を経験し、生き物から食材に変化する鶏の姿を体感した。

直後は、混乱とショックが入り混じった感情に包まれ、しばらく頭が靄に包まれるような感覚であった。しかし、その日の昼食として屠殺した鶏が出てきたとき、私は抵抗なく食事をすることができた。また、屠殺の出来事が頭を占めていた時間はそれほど長くなく、生き物を殺し、それを食す自分を違和感なく受け入れていることに気づいた。それは、屠殺前に自分に対して予想していた反応とは真逆だった。

その理由の一つとして、鶏の屠殺を理論的に理解していたことがあるのかもしれない。屠殺は、私たちが生きていくために必要な行為であり、生活の一部であり、「食」と切り離せない重要な意味を持つものであると納得していた。そのため、葛藤なく受け入れるこ

とができたのだと考える。

次に屠殺について思考したのは、帰国後であった。帰国後、毎日3回の食事を摂るたびに、屠殺について思い返すようになった。経験した直後は、直感的に納得していたが、帰国後はその意義について改めて考えを深めた。

屠殺の経験を通して、私は自分が背負っていることの大きさを直接知ることができた。同時に、自分が当たり前のように行なっている食事が、命を奪う行為の上に成り立っていることに恐怖を覚えた。その恐怖心が、鶏の血管を断ち切る手に戸惑いとなって表れ、困惑や辛さを自分にもたらしたのだと考察する。しかし、それらの感情も含めて知る機会を得られたことに、強い感謝の気持ちを抱いた。

私は、自分なりの視点から屠殺の経験をまとめることができたと感じ、一定の納得をしていた。しかし、屠殺の経験についての思考は、さらに深まっていくこととなった。

帰国後に控えていた能登での活動の一つに、魚を捌くイベント「捌ける塾」への参加があると知り、事前に自らの認識を整理することにした。

これから能登で魚を捌く経験をする。私は今まで魚を調理したことはあるが、捌いたことはない。でも、なんとなく鶏の屠殺ほど混乱することはないだろうな。

それはどうしてだろう。なぜ自分はそういう考えを持ったのだろう。

魚を捌くときの自分を想像し、疑問を膨らませながら、能登へと向かった。

能登では、地域住民が魚を捌けることが当たり前であるほど、魚を捕って食べる文化が根付いている。「捌ける塾」では、そのような土着の文化に触れながら、魚の捌き方を学んだ。一人につきカワハギを二匹、スルメイカを一杯捌いた。それらを、お刺身と名めろうにして、自分が捌いたものをいただいた。

予想していた通り、鶏の屠殺ほど大きなショックはなく、穏やかな雰囲気の中で体験は終わった。

その日の夜、マレーシアでの鶏の屠殺と、能登での魚を捌く経験を、時間をかけて比較しながら考察した。

鶏の屠殺には、

- ・命そのものについて、自分たちの食に関わっている命をいただく行為について学ぶ側面があった
- ・食材は鶏で、叫び声を聞いたり、血が流れている様子を見たり、羽をもいだりした
- ・「生き物」から食材としての「肉」へと変化する過程が明確であった
- ・「コケコッコ」の鳴き声を聞き、生きて動く姿を日常的に見た
- ・経験後には、激しい困惑やショックを覚えた

これに対して、魚を捌く経験は、

- ・地域を理解することや、生活に根ざしたスキルを身につけることに重点があった
- ・食材はカワハギとイカで、血抜き済、叫び声や血の温かさはなく、捌く前から捌き方のイメージができていた
- ・終始「食材」として認識しており、捌いている最中にも美味しそうだと感じてしまった

このように、食材や学ぶ環境の違いによって感じ方は大きく異なっていた。同じ命を扱っているにもかかわらず、感じ方が異なるということは、自分がそれぞれに対して対等に向き合えていないのではないこと表れでないかという不安を抱いた。

帰国後、鶏の屠殺の経験を自分なりに消化できたと感じていたが、その考えは再び揺らぎ、十分に整理しきれない状態へと戻った。

一方で、食材に対する前提の違いという観点から考えると、食材によって捉え方が異なることは自然な反応とも考えられた。日本では、鶏の鳴き声を聞いたり、養鶏場を見たりする機会はほとんどない。しかし、海や川に行けば野生の魚がいて、水族館など生きている魚を見ることが出来る施設は多い。また、精肉店で鶏を屠殺している光景を目にすることがないが、魚屋や料理人が魚を捌く場面は比較的身近に存在し、その行為を想像することも容易である。

以上の観点からすると、魚に関しては、鶏よりも「生」と「食」とを連続したものとして捉えやすい環境にあるとも言えるかもしれない。さらに、マレーシアで鶏を家畜として飼育している人々は、私が魚に対して抱いている感覚を、鶏に対して抱いている可能性もある。

このように一定の理解には至ったものの、私はいまだにこれらの経験を十分に消化しきれず、問いは今もなお自分の中で膨らみ続けている。

鶏の屠殺、帰国後の内省、そして能登での魚を捌く経験を経て、その過程ごとに自分の思考は大きく変化した。しかし、変わらない考えもある。それは、自分が背負っているものの大きさと重みを自覚することの重要性である。

「いただきます」、「ごちそうさまでした」という言葉に込める感謝の気持ち。食材そのものへの感謝、そして食事できることへの感謝。その思いは、これらの経験を通してより深まり、今後も失われることはない。

答えのない問い向き合う中で、さまざまな経験や知識が繋がり、新たな視点が加わることで、既存の考えはさらに深まり、再形成されていく。今後も問いを膨らませながら、考え続けていきたい。

## 豊かさの再考

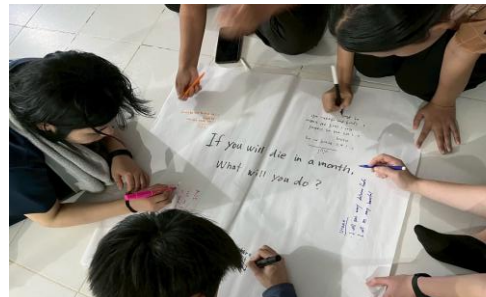
### — マレーシアでの海外ボランティアを通して —

人間科学部 2年

伊藤 詩野

今回のマレーシアでの海外ボランティア活動は、私にとって「豊かさとは何か」を問い直すきっかけとなった。それは、文化や環境の違いから新しい価値観を得るだけでなく、自分の価値観を見つめ直す時間でもあった。そしてこの経験は、来年度から社会格差を専門的に学ぼうとしている私にとって、非常に意義のあるものになった。

特に忘れがたい経験となったのは、3日目の夜の活動だった。ホームステイをさせてもらった村の私たちと同年代の人々と交流する時間が設けられていた。始まる前、ただお互いのことを話す時間だと思っていたが、その場で投げかけられた問いは、“If you will die in a month, what will you do?”——「もしあと1か月で死ぬとしたら、あなたは何をしますか？」というものだった。突然の問いだったが、私はすぐに家族や友達顔を思い浮かべた。この問いは、「あと1か月しかない」という時間の制約が前提だった。しかし考えを巡らせるうちに、単に時間の問題ではなく、私が心から家族や友達との時間を大切にしていることに気づいた。さらにこの夜の時間だけでなく、9日間のマレーシアでの活動の中で、マレーシアの人々の日常や暮らしぶりを見ることで、人との結びつきの中にこそ存在する、目には見えない「豊かさ」を知ることができた。日々の食事を皆で囲み、教会に集まって祈りの時間を共にする彼らの姿はとも印象的であった。



普段、「豊かさ」を経済的成功や物質的な充足と結びつけて考えることが多い。しかし、「あと1ヶ月で自分が死ぬ」と言われた時に真っ先に思い浮かべるのが自分の周りにいてくれる「人」の存在だとするのならば、「豊かさ」とは「大切に思える存在がいること、支えあえる存在がいること」なのではないだろうか。前述した通り、私はこれから社会格差を専門的に学んでいくつもりである。多くの場合、社会格差は所得や資産といった

経済的指標によって測られる。しかし、今回の経験を通して感じ学んだ指標や数値では測ることができない「豊かさ」の存在を忘れずにいたい。マレーシアでの九日間は決して「豊かさ」に対する明確な答えを与えてくれたわけではない。しかし、「豊かさとは何か」という非常に難解な問いに対して問い続ける姿勢を私に与えてくれた。これからは私は、この経験を出発点として、自分の周りにいてくれる人々に感謝の気持ちを忘れずに、「豊かさ」の本質を探求し続けていきたい。



## 心のままに求める

### — 苦しんで自分と向き合う時間の豊かさ —

人間科学部 1 年  
亀本 史菜

今回のマレーシアスタディツアーの案内を見て、「マレーシアに行ったことがないから行ってみたい。」「日本では知ることが難しいことをたくさん知りたい。」と感じ、参加を希望した。日頃から未知のことに対して興味を持つ私は、その興味のままにマレーシアへ向かった。もちろん、マレーシアではたくさんの新しい出会いや学びがあり、興味は満たされていった。しかし、全体を振り返った上で最も心に残っているのは外向きの矢印ではなかった。それは、自分の心に対する内向きの矢印であった。

スタディツアーでは、その時点で自分の心に最も残っていることについて、メンバー内で共有する時間が3回あった(写真1)。この時間が、最も苦しい時間であり、最もマレーシアに来た意味を感じる場面であった。非日常の空間であるからこそ、自分の心に素直に耳を傾ける時間となった。シェアリングを通して私が考えたことをまとめる。



写真 1 シェアリングの様子

大きなテーマは、「求めること」であった。このテーマを考え始めたきっかけは、インバック村におけるマディンさんのピースセミナーである（写真2）。マディンさんは「自分を愛するように他者を愛する」という言葉をくれた。しかし私は、大前提としてある「自分を愛すること」に疑問を持った。これが一番難しいと感じていたからである。

最終日に訪れた無国籍集落で、4歳の女の子と出会った（写真3）。おそらく彼女は今生まれ育った環境が当たり前で、私たちから見ると不足している生活を楽しんでいるように見えた。私自身も幼い頃は、世界を知らないからこそ自由に好きに生きていたように感じる。しかし今は、求めた先で求めたことが上手くいかないことが多いことさえも知ってしまったがために、素直に求めることが難しくなった。だからこそ、本当の自分を隠し、現実的な第二の自分を持つことで、傷つかないように生きている。そんな自分を愛することは難しい。家族や周りの人に素直に甘えることにも怯え、加えて自分自身ですら自分の味方になることができず、孤独を感じている。どうすれば素直になれない自分を許すことができるのか。

この文章を書くにあたり、再び時間をかけ自分と向き合った。日頃隠している本当の自分に触れることは苦しい。しかし同時に、苦しむ時間が自分を癒す幸せな時間だとも感じた。自分が自分に対して心を開くことを許せているような気がした。他人にどう評価されるか。世界の中で自分がどの立ち位置にいるのか。そのような他人軸の話ではない。自分が心から求めているものに耳を傾け、それが実現するかどうかに関わらずまず求めてみる。この過程が、私にとって最も自分を愛し、癒している時間なのではないかと思う。

私は、マレーシアから帰ってきてから興味のままにマレー語を勉強してみる自分が好きだ。何か機会があれば、今回のように興味のままに飛び込んでみる自分が好きだ。自分が心から求めるものを探し続け、それを求め、行動してみる。その先にあるものが何かはわからない。それでもこの時間こそが私を癒し、豊かにしていくのかもしれない。



写真2 マディンさんによるピースセミナー



写真3 無国籍集落で出会った女の子

## 豊かさの再考

### — 理想と現実の往還の中で —

法学部 2 年  
門脇 葵

今回のスタディツアーの主題は、「豊かさとは何か」であった。本稿では、現地での体験、とりわけ命に向き合った経験を出発点として、支援の構造と自己の倫理観の変容について考察する。

スタディツアー参加以前、私は倫理とは汚れないこと、すなわち理想的な自己像を保つことであると漠然と捉えていた。誰のために生きるべきかという使命を見出し、利己性から切り離された存在でありたいとどこかで考えていたのである。したがって、私にとっての豊かさとは、物質を度外視する形にはなるが、高潔な目的を持ち、曇りのない自己に近づくことにあると考えていた。



しかし、現地での生活と活動を通じて、この理解は揺らいだ。7日目の朝、鶏を屠殺した際、私は強い葛藤を覚えた。殺めることを躊躇したのではない。可哀想などといった感情が湧いてきた訳でもない。抑え込んだ命の姿を前に、自分自身もまた社会や制度の中で代替可能な記号として機能し、消費されていく現実を重ねたのである。換言すれば、そこで私は直感的に、自分が無形の商品を購入し、何らかの自己変容を期待してここに来た「優良な消費者」に過ぎないのではないかと気づいた。そして同時に、その構造を成立させる一端を担う「加害者」でもあり、さらには手の中の鶏のように消費される存在であるのかもしれないと思いついた。

また、施設での交流においても、温かい歓迎の背後には長年の寄付や制度的支援、経済的な関係性の蓄積が存在しうることを実感した。支援は純粋な善意だけで成立するものではなく、複数の要因が重なり合う構造の中にあるのだと実感した。

この過程で、私は自らの理想への固執が、むしろ現実との距離を生んでいたことに気づいた。他者を消費したくないという思いそのものが、新たな自己中心性となっていたのである。

一方で、シェアリングの時間に仲間の経験や思考に触れる中で、自分の葛藤は決して特異なものではないと知った。同時に、すでに具体的な行動を通じて社会課題と形容される事実に向き合い、他者の生活に寄与している人々が多く存在することにも改めて気づかされた。この事実は、自分の思索が遅れているのではないかという焦りを生む一方で、行動の重要性を自覚する契機ともなった。

—それから私は、思索と行動を対立的に捉えるのではなく、両者を往還する姿勢が必要で

あると遅ればせながら認識することができた。それ以降、CFF や無国籍の子供たち写真を、目をそらさずに見返せるようになりつつある。



—そして私は現在、法学部で法律を学んでいる。社会問題という事実に対する関わりは、直接的な働きかけだけでなく、皮肉に思われるが、制度や政策を通じて関わる道も存在する。法律は、個人の善意だけでは解決できない構造的な事実に向き合うための枠組みであり、社会の中で持続的に他者と関わるための手段の一つでもあると考えて

ている。この学びを深めることもまた、私にとって社会に関わる具体的な実践の一形態であると受け入れられるようになった。

ツアー終了後、私は「豊かさ」の意味を改めて考えている。豊かさとは、理想的な自己像を獲得することや、他者を救う主体として確立されることのみを指すのではない。むしろ、不確実で矛盾を含む現実の中に留まり続ける覚悟や、他者と関わり続ける関係性の中に見出されるものであるのかもしれない。

私は、自分の人生の方向性を明確に定めきれていない段階にある。しかし、その不確かさを自覚し続ける姿勢こそが、他者の生活を単純な物語として消費しないための一つの抑制となると考えている。理想像への執着を手放し、現実の複雑さに向き合い続けることが、私にとっての自由であり、同時に一つの「豊かさ」である。

今後この経験と法学の学びを結びつけ、理想と現実の緊張関係を引き受け続けたい。それこそが、曲がりなりにも私にとっての実践であり、今後の学びと行動の指針となるだろう。

---

## 偽善者のエゴが愛に変わるまで

### ー ボランティアに対する自分の答え ー

社会科学部 2 年

小島 杏斗

私は、岩井先生の授業を履修していた関係で、今回のマレーシアスタディツアーの存在を知った。大学入学以前から海外ボランティアに興味があったが、何かと理由をつけて後回しにしてしまっていた。しかしこのツアーの存在を知った時に「今の私が行くことに意味がある」と本能的に感じ、参加を決意した。そんな私はボランティアに興味を持ちながらも、現地の人からすれば単なる偽善行為でしかないのではないかと頭でっかちに考えていた。たかが大学生の一週間のボランティア活動が現地にもたらすものは限りなくゼロに等しい、もしくはボランティア自体がエゴであり迷惑にしかならないのではないかと本気で考えていた。私は「偽善者の自分に何ができるのか」という個人テーマを胸に現地入りした。

マレーシアで他の学生や現地の人と過ごした時間はいい意味で個人テーマを覆すようなものであった。ツアーの前半を過ごしたインバック村では小さな共同体の中で習慣化された共助を感じた。村で見られたのは一人一人が完璧に物事をこなし、完全体の集合によって環境が作られていくという合理的選択理論



ではなかった。最初から完璧な人間はいない、だから互いに補い助け合って社会を作っていくという精神だった。この精神に触れた時、私は「偽善者の自分に何ができるのか」と題した個人テーマが、完璧な自分を前提にした幻想的なものであったことを初めて認識した。そこで現実の不完全な等身大の自分を理解し、周りから感じたことや自分が考えたことに素直になってみようと思直した。

その根幹にはこのツアーのキーワードでもある本当の意味での「豊かさ」があったと感じた。この「豊かさ」に触れてからの私は、現地の人のために、滞在中はもちろん帰国後にやりたいことまでが堰を切ったように溢れ出した。この衝動は、非日常的なマレーシアでの生活から引き出されたアドレナリンによるものだったのかもしれない。しかし、自分の不完全さや未熟さを差し置いてでも、マレーシアで出会った人々が豊かに幸せに暮らすために本気で取り組みたいと思った。人生で初めてのこのような経験に戸惑いながらも、

自分の中でボランティアに対する現時点での一つの答えを出せたように感じた。ボランティアは現地ですること・やったことが全てではなく、日常の環境に戻ってからの行動も含めて考えるものであるという答えに辿り着いた。ボランティアは、偽善であろうが参加して対象に関心を持ち、それについて調べ学ぶ姿勢を継続することに本質があるのではないかと考えた。



ツアー中には、個人が感じたことや考えたことを参加者全体で共有する時間があった。2回目の共有の中で、私は上記の内容を話した。他の学生の考えや心境を聞いていた時に、一つの言葉が浮かんだ。修道女マザーテレサの「愛の反対は無関心である」という言葉であった。ある存在に対して関心を持たないことは、その存在を忌み嫌い、憎むことよりも恐ろしく悲しい

行為であるという彼女の言葉が、私のボランティアに対する答えと結びついた。ツアーでは様々な環境に置かれた子どもたちに出会った。彼らは文脈によっては社会的弱者と表現される存在であった。彼らが大人になった時にやりたいことをできるように、一つでも多くの選択肢を持てるように、社会に失望しないように、私は絶えず彼らに関心と愛を持ち、明るい未来を作るための働きを、まずは日本からしていきたい。そしてツアーを通して出会い、私にボランティアの本質を考える機会を与えてくれた全ての人に感謝したい。

## 美しい星に生きる


法学部 1 年  
南井 智尋

私は、このツアーに参加する前、私たちの生きる「現実」と、多くの人が語る「理想」の乖離の大きさに消極的になっていた。法学部で数々の事例を学んでいくうちに、人間の負の面に嫌気がさすことが増えていた。法律科目でなくとも、社会の仕組みに批判的思考と共に触れていくことで、ネガティブな現実を知る必要があった。2017年には NGO 団体



のオックスファムが、世界で最も裕福な 8 人と経済的に恵まれていないとされる世界人口の半分（約 37 億人）の資産額がほぼ同じだとする報告書を発表している。資本主義のもとに生まれた競争社会が、貧富の格差を生み出している。もし仮にこの 8 人が 37 億人に富を分配したら、衣食住に困る人はいなくなるだろうか。そうだとすると、競争社会における勝ち組が、自己犠牲のもとに栄光を手放そうとするだろうか。極論、現代社会は金こそ正義なのだと感じていた。

ツアーを経ても、現代は金こそ正義な社会という考えは変わらない。むしろ、こうして社会を批判している自分さえも、日本に生まれ、大学で勉強ができるという恵みを楽しみながら、将来は自己保身のために競争社会に生きてしまうのだろうかと思ってしまう。自己嫌悪にも陥る。

しかしツアーを通して最も印象に残ったのは、あらゆるネガティブ要素を超える世界の美しさだ。インバックの人々の温かさ、CFFM の子供たちの笑顔、緑豊かな景色、口にす  

 する食材、すべてに感謝が湧き出てきた。その理由は、人と人との交流、自然に包まれた生活、鶏の屠殺を通して「生きとし生けるもののつながり」を感じたからだと思う。そしてこのつながりは、すべての人間が求めているのだと思う。過去に参加したカナダでの先住民のレガシーをたどるツアーでは、「大地への信仰」を通してそのつながりが語られた。今回は「神への信仰」を通してそのつながりが語られた。遠く離れた地でも内に秘める願いが同じだと知ったとき、感じていた現代の陰りに対し

て希望を抱くことができた。そして CFF では、子供の家を築立って活躍する人材育成のための 2058 年までのモデルが示された。敷地内にはかつてのキャンプ参加者らの名前が彼らの作った道、貯水槽、建物などと共に刻まれていた。CFF の存在そのものが志を同じくする者たちの結晶なのだと知り、何世代も先の未来を思い描く勇氣が必要なのと思った。



「過去は変えられないが、未来は変えられる」というマディン牧師の言葉通り、どんな未来をつくり、その先の未来に何をのこすのか、生涯をかけて考え続ける。

## 豊かさについての今の私の暫定解

人間科学部 3 年

大塚 涼葉

私は海外ボランティアというものに抵抗があった。先進国で育った私たち若者が困難を抱えている地域に行っても、何の知識も技術も伝えられず、何も成し遂げられないと考えていたためである。

渡航前の事前研修で私は「豊かさ」を「余裕」と定義した。豊かさとは不足に支配されない状態であり、最低限の生活が満たされ、そこに $+ \alpha$ があることだと考えた。一般的に「豊か」という言葉を用いるとき、私たちは量や多さを指すことが多い。このことも踏まえ私は「豊かさ」を「可能性の幅」として捉えていたのだと思う。

マレーシアに向かう飛行機から見た空は綺麗だった。その時ふと、「人はいつから空を綺麗と感じるのだろうか」という問いが浮かんだ。空は本当に綺麗なのか、それともそう教えられてきただけなのか。そしてこの問いが、きっと私の中の「豊かさ」の答えを導いてくれる気もしていた。

マレーシアで待ち受けていたのは、流せないトイレや水しか出ないシャワー。私基準では、とても「豊か」とは言えない日常だった。それでも空は確かに綺麗だった。同じ空を見上げる仲間もそう感じていただろう。しかし、世界は一つでも、見えている世界は人によって違う。「綺麗」は空そのものではなく、空と自分の記憶や感情が結びついた瞬間に生まれるものだと気づいた。そこから、「豊かさ」もまた客観的に定められる量の多さではなく、主観的な世界との関係性なのではないかと考えていた。

インバックの村で過ごす最後の夜、年齢も国籍も背景も違う family が、みんなで一緒に笑顔で踊った。そして CFF マレーシアでは、小さな一つ一つの命の煌めきと価値に目を向けた。そして無国籍集落で出会った人々は、「持っていないもの」で語られる存在だった。国籍、安定した収入、教育を受ける機会。私はそこに「問題」を見に行っただけでなかった。しかし、そこにはタバコを吸いながら笑っている人がいた。携帯で誰かとつながっている人がいた。そこにあったのは、欠如ではなく生活であり、人生であった。私の基準では、携帯は「最低限」を超えた $+ \alpha$ の存在であった。だが彼らにとっては人生の基盤の一つであるのだろう。その時、私は自分の「最低限」が、いかに自分の世界の中で作られた基準であったか、そし



て豊かさは普遍的に物差しで測れないことに気付かされた。

さらに私は、外からの介入によって彼らの豊かさが奪われることを恐れた。知らなければ不足に気づくこともないが知ることで比較や葛藤が生まれる。豊かさを与えるはずの関わりが、かえって欠如の感覚を生むのではないかという不安である。では、知らないままの方が幸せなのだろうか。しかし、知らなければ選択肢は広がらず、変えられる未来もない。重要なのは、知るか知らないかではなく、その人たちの未来が一つに固定されないことである。

どんな日でも空は綺麗だった。美しさは余裕の産物ではない。空は所有できず、支配できず、届かない。だからこそ、美しく人との関係の中で意味を持つ。同じ空を見ても、誰一人として同じ感情を体験していない。空の美しさが物ではなく関係の中で意味を持つように、豊かさもまた外からはかる量ではなく、その人と世界との関係の中にあるのだと思う。

最終的に今の私にとって豊かさとは、世界を消費することではなく、世界と関係を結び、自分の内側に意味を生み出せることである。欠如がないことでも、多くを所有することでもない。その人なりの世界を持ち続けられること、そして、その世界が外部の単純な基準によって一義的に塗り替えられることで未来が閉ざされないこと、それが豊かさの核心であると今は考えている。



「人はいつから空を綺麗と感じるのだろうか」という問いは、私にとって、私たちはいつから自分の見ている世界を当たり前として受け取り、その意味を問い直さなくなるのだろうか、という問いでもあった。空が綺麗なのは、空が絶対的に美しいからではない。その瞬間、自分の記憶や感情が空と結びついたからである。同じように、豊かさもまた固定された基準で決まるものではない。その人の世界が一つの物差しで言い切れず、可能性が残されていることにこそある。

一週間を通して学んだのは、私たち若者が海外に行く目的は何かを成し遂げることではないということだ。現地に行き、現状を知り、学び、考え、その問いを持ち帰り、自らの社会や選択の中で生かしていくことこそが本質である。私にとって本ツアーは、知ることは怖いことではなく、可能性に溢れる煌めきであることを身をもって学んだ経験であった。

## 命と豊かさ

文化構想学部 4 年

高橋 真穂

2月4日から12日の日程で、マレーシアスタディツアーに参加した。参加を志望した理由は、遠く離れた場所での生活を知ることによって自分自身の生き方を考えたいと思ったからだ。2025年9月に富良野スタディツアーに参加した際に富良野で暮らす人たちの自然を大切にしている生き方に触れ、興味を持った。一方で自然と暮らすという言葉は響きがいいが、同時に課題も抱えながら生きなければならない。課題に向き合いながらも豊かに生きるにはどうすれば良いか考えたいと思い、このスタディツアーへの参加を希望した。また、このスタディツアーを通して、消費だけではない豊かさについて考えたいとも思っていた。現代の消費社会では、欲しいものが好きな時に好きなだけ手に入るのが豊かさであると定義されているように感じる。しかし、その豊かさは非永続的なものである。一方で、物質的に豊かでなくても明るく生きる人たちもいる。自分自身が飲み込まれていた消費の強迫観念に自覚的になり、他の人には定義できない自分だけの豊かさを見つけたいと考えていた。

訪れた村は、インバックとパパールである。ボランティア活動としては現地の小学校に通う子供たちとかかわったり、校舎のペンキ塗りを手伝ったり、孤児院で暮らす子供たちとかかわった。

そしてこのツアーを通して一番印象に残ったのは、鳥の屠殺体験だ。スタディツアーが始まる前に予告されていなかったことだったので、正直緊張した。一方で動物の屠殺を描写する漫画を読んだことがあったり、自分なりに動物を食べることについて考えたことがあったため、冷静に望める自信があった。しかしいざ体験する時になると、屠殺のデモンストレーションを見学しているときから涙が止まらなかった。



屠殺の手順としては鳥の足と羽を押さえながら首の羽をむしり取り、皮膚が見えたら首の太い血管に刃を入れる、というものだ。袋から取り出された鳥は、個体差はあったもののおおむね大人しく、まるで自分がこれから死ぬということを理解しているようだった。しかし、いざ首を切られ死の間際になると、途端に体が暴れだした。なんとなく、これはこの鳥の意志ではなく鳥の体に刻み付けられた本能ではないかと考えた。体に刻み込まれた最後の抗いが終わりゆっくりと鳥の体から力がなくなっていくのを見て、ようやく自分が命をいただいて生きているということを理解できたような気がした。そして自分の手で

命の終わりを感じなければならぬと直感的に考え、泣きながら屠殺の体験に立候補した。私は鳥の足を押さえる担当だった。生きた鶏に触れるのがほぼ初めてだったが、触れてみると足がとても温かく、生きた生命を感じた。しかし同時に、首を切られ暴れる鳥の足を押さえていると、自分がその命の生きようとする意志を冒瀆し押さえつけているように感じてしまい苦しかった。そして、終わった後はショックで呼吸が苦しくなった。

一方で体験後、自分たちが殺した鳥を食べたのだが、普段通りにおいしさを感じられてしまった。自分が殺した生きた鳥と、食事に出され「食べ物」という物体になった鶏肉とがむすびつかなかった。次にもし屠殺を体験できる機会があれば、殺してから解体し、食べるまでを自分の力で成し遂げたいと考えた。そうすることにより、生きた命と食べ物が直感的に結びつき、より命について考えられるようになると思ったからだ。



この体験を通して、貴重な命の上に成り立っている自分自身は大切にしなければならないという考えを持つようになった。自分を構成しているものが地球上の大切な命だと思えることができれば、自分の命も大切にできるようになるのではないかと考えた。今までの自分は自分を卑下してしまったり、自信をなくしてしまうことが多くあったのだが、これからは自分を好きになる、自分を卑下しない、自分を大切にすることを実践したいと考えた。そしてこのスタディツアーは豊かさについて考えるものだったが、私は、豊かさとは自分の周囲の人やもの、あるいは自分を構成するものを愛し、感謝できるようになることだといった結論付けた。これから考え方が変化する可能性もあるが、自分が今回感じたことを忘れずにこの先の人生を歩んでいきたい。

---

## 失われていく世界の中で、私は「今」を愛することを学んだ

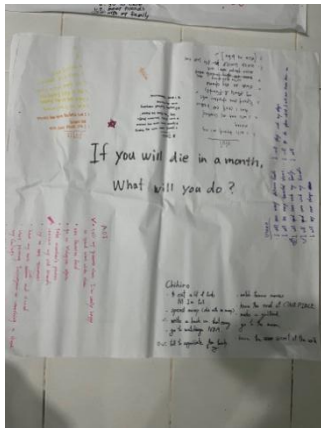
社会科学部1年

王 念忱

私はこれまで、あらゆるものはいつか失われていくものだと感じながら生きてきた。大切な人はいずれ離れ、どれほど強い感情もやがて薄れてしまう。だからこそ、目の前の時間を十分に味わうよりも、「どうせ終わってしまう」という思いの中で立ち止まってしまうことが多かった。しかし、今回のマレーシアでのスタディツアーの中で、その感覚は少しずつ揺らいでいった。毎朝、食事の前に行われる祈りの時間。そこでは、人々が今日食事を取れること、生きていること、その一日を迎えられたこと自体に静かに感謝を捧げていた。その姿は、これまでの私がほとんど触れたことのないほど純粋な「感謝」の形だっ

た。帰国後、私はふとした瞬間に感謝の気持ちを抱くようになった。食事をするとき、眠りにつくとき、家族と抱き合うとき——それらが当たり前ではなく、「今ここに存在している時間」なのだと感じるようになったのである。私は初めて、生活そのものを愛する感覚を知った気がした。

都市で生まれ育った私は、物質的に不足のない環境で暮らしてきたにもかかわらず、常に説明しがたい空虚さを抱えていた。何かに追われているような感覚が消えることはなかった。しかしマレーシアでは、スマートフォンもなく、日本のような便利な生活設備もなく、自由に選択できる環境も限られていた。それにもかかわらず、むしろ心の奥から満たされる感覚があった。特に印象的だったのは、「もし一か月後に死ぬとしたら何をするか」という問いについてのワークだった。私たちは何度も選択を迫られ、やりたいことを削ぎ落としていった。そうして表面的な欲望を一つずつ手放していく中で、最後に残ったのは「出会った人を大切に、愛すること」だった。



私はこれまで、女性であること、外国人であることなど、自分のアイデンティティについて葛藤することが多かった。少数派として立つときには社会の特権構造を強く意識する一方で、自分が教育や家庭環境といった面で特権を持つ側にいるとき、その事実から目を背けてしまうこともあった。考え続けることの痛みから、逃げてしまうこともあったのである。しかし今回の経験を通して、私はあまりにも「大きな概念」ばかりを見つめていたのではないかと気づいた。社会を変えることは容易ではないが、まずは目の前の人を見て、感じ、関わり続けること。その積み重ねはゆっくりであっても、確かに何かを変えていくのだと思えるようになった。そして私は、不完全でありながらも一歩を踏み出そうとしている自分自身を受け入れ、少しだけ愛せるようになった。

このスタディツアーは、私にとって「愛を学ぶ時間」だった。先生や仲間を支えられ、現地の人々に無条件に受け入れられた経験を通して、人と人とのあいだには、国籍や宗教、文化の違いを越えて存在するつながりがあるのだと実感した。マレーシアは、私にとってはもうただの遠い南国ではない。この場所と出会ったことで、私の心の一部は確かにそこへと結びついたままである。



## 私がマレーシアに導かれた理由

法学部 4年  
渡部 未莉

### 1. はじめに

2月4日から12日の8日間マレーシアボルネオ島のパパールとインバック村に滞在した。本ツアーを行うに当たって尽力していただいた岩井先生と CFF スタッフのけんじと Jonathan に感謝の意を表します。また、現地でホストファミリーとして受け入れてくださった方々や村の小学校の先生方、子どもたち、関わってくださったすべての人に感謝します。

### 2. 最も印象的だったこと

私が最も印象的だったことは、村の青年たちとの出会いである。自分自身は、2年前 CFF のプログラムに参加したという背景があるため、このツアーに参加しようと思った動機として、時間がある大学生のうちに CFF マレーシアの子どもたちにもう一度会いたいというものが大きかった。したがって、村に滞在する体験へは、知らない世界に触れることができるといった程度のモチベーションしか持ち合わせていなかった。このツアーは村へのホームステイから始まるため、1日目から自分がここに来た理由にずっと向き合うことになった。異国から来た私たちを快く受け入れてくださるインバックの人々に対して、若干の罪悪感を感じつつ過ごす日々が続いた。



しかし、ある夜に村の青年たちと共にシェアをする時間があった。そこでは「あと1ヶ月で死ぬとしたら何をしたいか」といったテーマについてそれぞれ書き出し、最終的に1つを選ぶものだった。青年たちとグループになったのだが、そこである女の子との出会いがあった。その子は全体で集まったときから何故だか目を惹く存在で、仲良くなりたいな

と思う女の子だった。偶然にも彼女と同じグループになり、少し心躍ったが、話しかけてみても彼女は英語が話せず、別の青年を介して翻訳してもらう形での会話が続いた。私にとっては、もちろんそのシェアの時間も大切だったが、何よりここで彼女と出会えたことに意味があるのではないかと帰国した今、強く感じている。青年たちと夕食を共にした時も別れのパーティーをした時も、彼女とは多く言葉を交わすわけではないがずっと隣にいて、少しでも同じ時間を共有したいと思えた。村での最終日、教会での別れがあったが、その際も彼女から近寄ってきて最後の時間を共にした。別れの際もお互いに涙を流すほど何故だか別れが悲しく、彼女なりに幸せに生きていてほしいという気持ちでいっぱいになった。



人との出会いというのは偶然でもあり必然でもあるのだと考える。意図せず会った人が自分の人生に思いがけない機運をもたらしてくれることは、しばしばあるだろう。今回、村での彼女との出会いは、まさしく偶然かつ必然だったのだと思う。損得勘定や理屈を抜きにして心が惹かれ、この人の幸せを願いたいと思う体験は初めてだった。この経験は自分が自分らしく生きること、自分が愛されることを求めるよりもまず人を愛すること、を実践するのに役立つだろう。目に見えない彼女との心の繋がりが、私を強くしてくれたように感じている。

### 3. まとめ

マレーシアを訪れ、村の人々、青年たち、子どもたち、CFFの子どもたちに出会えたことで自分の生きるモチベーションが上がった。なりたい自分になり、志を成し遂げたいという強い意志が芽生えた気がする。そしてこのツアーに参加しなければ出会えなかった早稲田のみんなと岩井先生との出会いにも感謝して、4月からの社会人生活も頑張りたいと思う。

## 豊かさとは何か

### — マレーシアでの経験を通して —

国際教養学部 2 年

山崎 花菜

マレーシアへのスタディツアーでのテーマは「子どもたちと共に豊かさを考える」であった。マレーシアに渡航する前の第2回のミーティングでは、メンバーと豊かさの概念について検討した。話し合いを通して、自分の「豊かさ」とは、物理的、経済的な要素の有無だけではなく、それらを自分がどう認識し、感じているかという、主観的側面が重要なのではないかと考えた。



現在の生活では、家があり、1日3食とることができ、自由にお金が使え、教育が受けられているなど大きな不便はない。しかし、自分自身の努力や行動によって、さらに豊かな生活を実現できる可能性があるのではないかと考えた。

ツアーを通して「豊かさ」とは何かについて考える中で、「豊かさとは笑顔につながっているのではないか」と感じるようになった。現地ではさまざまな生活を送る人々に出会い、特に無国籍の人々が生活をしている場所に訪ねた時、彼らの生活は「豊かではない」と感じた。そして、その人々のために何ができるのかと考えた。しかし同時に、人によって豊かさや幸せの感じかたは異なることであり、自分が人々の「豊かさ」を判断するものではないと感じた。もし自分がその環境で生まれて育っていたなら、それが当たり前の日常であり、そこに豊かさを見出していたかもしれない。

そのような違いがある中、どのコミュニティにも共通していると感じたのが「笑顔」だった。生活環境や条件が異なっても、みんな笑顔に過ごしていた。この気づきから私は豊かさとは、物の多さや経済的条件だけではなく、「自然に笑顔が生まれる状態」なのではないかと考えた。私が感じた笑顔とは、困難がない状態ではなく、人とのつながりの中で安心して過ごせている状態を示していたと感じた。もちろん、笑顔が生まれるためには、食事、住む場所、家族、安心安全な環境など生活を支える要素が必要である。これらは、豊かさそのものというよりも、豊かさを支える土台だと考えるようになった。

人は、自分の知っている世界の中で「豊かさ」を感じる。だから、自分の生活している環境が限られているという概念すら存在しない場合もある。私は支援や活動について考える中で、外部の人が何が幸せかを決めるべきではないという思いを持つようになった。し



かし、生まれた場所によって知る機会や経験できる可能性が制限されることには不平等を感じる。だからこそ、特定の価値観を押し付けるのではなく、人々がさまざまな可能性に触れる「機会」は誰にでも開かれているべきで、その機会がどこでも受けられるような環境を一緒に作る事が大切なのではないかと考えている。「こう生きべき」という導きではなく、新しい選択

肢を知った上で、今の生き方を選び続けることも尊重するべきである。人生を変えることではなく、安心して日常を生きる中で、自然に笑顔になれる環境を支えることだと考えている。

ボランティアというものは困っている人々を助きたい、支援したいという気持ちから、人々や社会のために行動をすることと定義していたが、活動が続ける中、「～のため」という言葉には上下関係や自己満足的な側面が含まれているのではないかという違和感を覚えるようになった。支援する人、環境を変える人ではなく、安心を作り、関係を育て、コミュニティの一員となる事が、私の目指す活動の姿であると考えている。私は人々の人生を変える存在ではなく、安心できる関係や機会を共に作りながら、その場の一員として関わり続けられる人になりたい。その関わり方をこれからも問い続けていきたい。

## 形容しがたい「肌感覚」を刻む

— ユースとの対話と、最終日の境界線 —

社会科学部 1 年

山岸 奈央



今回のスタディツアーに参加した私の動機は、一種の自己実験だった。自分一人では決して選ばない場所へ身を置き、物質的な豊かさを手放したとき、自分が生きる上で「譲れないライン」はどこにあるのか。それを確かめたかった。学部の勉強や WAVOC サークルで社会課題について考えてはいても、実際何かイノベーションを起こせてい

るかといったらそうではない。そんな「自分を形容する言葉」を持たない自分を、何らかの経験で埋めたいという焦燥感に突き動かされていた。

ツアーの中盤、教会に関わっている現地ユースたちとの交流の中で、忘れられない瞬間がある。「もし、あと一ヶ月しか命が残されていないとしたら、あなたは何をするか」という問いについてグループで考えたときだ。同世代である彼らの譲れないものは、Family、そして“Worship”だった。マレー語がわからないのでうまく話せなかったが、その心は嘘偽りないものだとすぐに伝わってきた。流行りの歌を口ずさむように聖歌を歌い、踊る。彼らのその真っ直ぐな瞳を前にしたとき、カトリックの高校に通っていた私にとって聖書や聖歌という文化は馴染みあるものだったのに、なぜか動揺した。彼らにとっての信仰のように、魂を込めて愛したいと思える確かな何かがあるだろうか。記号的な所属や、まだ見ぬ未来への心配ばかりに囚われ、「今、ここ」にある信念を置き去りにしていたのではないかと、自分を疑いたくなった。

彼らとの温かな交流を経て迎えた最終日、私は無国籍集落という現実直面した。一面のゴミ、タバコを吸って寝転がる男性の傍らで無邪気に走り回る子どもたち。統計上は「無国籍」「貧困層」と括られる彼らにも、当然、一人ひとりの人生がある。子どもたちは好奇心からか、私たちの姿をスマートフォンで動画に撮っていた。レンズを向けているはずの私たちが、彼らから「撮られる対象」へと逆転する奇妙な空間。私は彼らに笑顔で話しかけることができなかった。それは「救いたい」という一方的な善意の無責任さを自覚したからであり、何より、その場の圧倒的な空気に飲み込まれたからだ。そこには、統計では表せない、生々しい肌感覚があった。



日本に帰国して少し時間が経ち、改めて「日本はいいな」と身体が感じている。清潔な水、落ち着いて眠れる夜、整った交通網。それらを楽しむ幸せを噛み締める一方で、無国籍集落で感じたなんとも言えない感情もまた、消えずに残っている。結局、私は自分が社会のどの立場で、何者として生きるべきなのかも、まだよくわからない。けれど、あの境界線で感じた形容しがたい「肌感覚」だけは手放してはいけないのだと思う。安易な言葉で自分を定義するのではなく、この違和感を抱えたまま、自分が心から「愛したい」と思える何かを、この日常の中からじっくりと探し続けていきたい。

## 終わりのないグローバルな荒波に抗う

平山郁夫記念ボランティアセンター准教授

岩井 雪乃

ツアーにはさまざまな経験が組みまれていたが、私自身が一番考えさせられたのは、インバック村での滞在だ。日本と変わらない便利な観光都市コタキナバルから、バスに揺られて6時間。それも、ただの道路ではない。「日光のいろは坂がずーっと続いている」ようなクネクネした山道を進んだ先の、どこまでも続く森の中に、インバック村はあった。

村の方々は、全力で私たちを受け入れてくれた。伝統楽器隊のみなさんによる出迎えの演奏から始まり、歓迎会、交流会、送別会と、3日間の滞在で毎日がパーティーだった。村の若者たちと互いの価値観を問い直すグループワークをし、小学校ではレクレーション大会をさせてもらい、教会のミサにも参加させてもらった。ホームステイ先のお母さんと娘さんは、毎朝4時に起きて食事の準備をしてくれた。

そんな風にインバック村は、都市からはるか離れて、自然豊かでコミュニティのまとまりが強い地方の農村である。しかし、それでもやはり、グローバル化の荒波にさらされていた。直径1m以上もある巨大な丸太を満載した大型トラックが、町へ向かって何台も村を通り過ぎていた。村の周囲の緑の森をよく見ると、アブラヤシがきれいに並んでいて、プランテーション開発が進んでいた。村の中を流れるキナバタンガン川は、川幅30mの豊



キナバタンガン川



ホームステイ先のママと

かな流れであるが、茶色く濁っていて泳ぐ人はいない。アブラヤシのための伐採で水は濁ってしまい、農薬が散布されているために化学的にも汚染されているという。

そして、このような外部からの介入は、今に始まったことではない。私たちの受け入れの中心である村の牧師からは、第二次大戦時の日本軍による占領被害の体験談を聞いた。日本軍によって亡くなった祖父、戦災孤児となった父、そしてご自身まで、

世代を超えて引き継がれてしまった「戦争の见えない傷跡」は、今もなお生々しかった。私が加害者側の子孫であるという、目を背けたい事実を認識する苦しい経験となった。

さらに、サバ州の歴史を紐解けば、外国勢力による支配は16世紀ごろから始まってイギリス、オランダ、日本が関わり、近年では中国、インド、オーストラリアとの経済的関係が強くなっている。交通の便が悪い、近代化から取り残されたように見え



丸太を運び出すトラック

る地方の農村であっても、圧倒的なグローバルな力が働いているのが、今の世界だ。私自身の研究とボランティアの活動地は、アフリカ・タンザニアの農村である。そこでも、グローバル企業が農民を排除しながら、観光開発や政府と結託した自然保護区の拡大を進めている。巨大な力に太刀打ちできない農民の小さな声を、私はずっと聞いてきた。インバック村の人々も、自分たちの資源を国家やグローバル企業に奪われている。これにどう対抗していくのだろうか。タンザニアと共通する、世界の格差、グローバル企業の暴力を目の当たりにし、暗い気持ちになった。

「平和は言葉だけでは実現できない。行動を起こさなければならない」という言葉がある。

では、私は何ができるのだろうか。サバ州からの木材やパーム油は、日本も主要な輸出先であり、私たちは毎日消費している。すでに取り組んできたつもりだが、改めて自分の消費行動を見直そうと思う。そして、これからも続くタンザニアでのゾウ獣害対策プロジェクトの中で、類似の構造的な問題に直面するインバック村の人たちに思いを馳せながら、私はタンザニアの農民の仲間と共にグローバルな荒波に抗っていきたいと思う。

# 杯の思い出



## in 小学校



## マラソン





Jumpa lagi!

—おわりに—

平山郁夫記念ボランティアセンター准教授

岩井 雪乃

本スタディツアーを企画するにあたり、認定 NPO 法人 CFF に実施運営を依頼しました。代表理事の安部さんとは、私が WAVOC に就職した 2006 年に出会い、その時は、まだ CFF マレーシアの設立前でした。私の早稲田大学での最後の仕事である本スタディツアーを、安部さんが創り上げてきた CFF と協働できたことは、とても感慨深いです。

このスタディツアーは、「豊かさ」をテーマに設定しました。ツアーの中では、自然環境は「豊か」だけれど、同時に電化製品のない「不便な」村で、「言葉が通じない」けれど「おおらかに受け入れてくれる」人々に囲まれて、集団生活をしました。

このツアーの大きな特色は、「活動中はスマートフォンをあずける」ルールでした。「CFF プログラムは、いつもそうしてますよ」と、担当者けんじから聞いた時、「私のプログラムも絶対にそうしたい」と思って決めました。

スマホは、「豊かさ」の象徴です。私がいつも活動しているアフリカのタンザニアでは、経済的な余裕ができると、みんなスマホを持つようになります。科学技術の粋を集めた小さな端末は、より多くの人とつながり、多くの情報を得ることができるようになります。そして、そのおもしろさ、便利さから「依存」にもなってしまいます。このツアーでは、「経済的な豊かさ」の象徴であるスマホを手放す、つまり「お金」「タイパ・コスパ」という指標を手放して、そこから見えてくる別の「豊かさ」を考えてほしかったのです。

個人報告を読むと、メンバーは、「豊かさ」をそれぞれに考察したことがわかります。「笑顔」「大切な人がいること」「愛すること」「葛藤を抱えた不完全な自分を受け入れること」・・・私が想定していた以上の深い考察をしてくれました。

さらにメンバーは、マレーシアで感じたことを、ツアーの終了とともに頭の片隅に押しやるのではなく、「日本での日常生活の中で、いかに考え続けるか」を自分に問いかけています。現実の世界は、絶望的に不平等です。劣悪な衛生環境に暮らす無国籍の人たちがいる一方で、ウォシュレットの清潔なトイレが当たり前の自分たちがいます。戦禍の中で殺されている人がいる一方で、それを安全な場所からテレビで見ているだけの自分があります。それでも、このツアーに参加したメンバーには、この不平等から目を逸らさずに、世界の「豊かさ」のためにできる行動を続けて、抗ってほしいです。

その行動は、1 人では続けるのが難しいかもしれません。でも、ここでつながった仲間と相互に励まし合ったら、継続する力になるでしょう。

私は、2026 年 3 月で早稲田大学を早期退職します。その最後のスタディツアーで、意欲の高いみんなと出会えたことを、とてもうれしく思っています！このメンバーとの出会いを大切に、これからも育てていきましょう！